

みんなの好きな聖書のお話

年長組の子どもたちは、3年間の園生活の中で
神さまのお話をたくさん聞いてきました。

「あなたの好きな聖書のお話は何ですか？」

と尋ねてみると、いくつもの言葉が
寄せられました。



「私はノアさんのお話が好きなの。

ノアさんはね、神さまのことをもとから知っていてね、好きになったの。でも他の人は神さまのことを少しは知っていたの。でも『神さまを信じなきゃ』っていうことまでは知らなかったの。それからね、^{はこぶね}方舟って、はこのふねでしょう？ 水に染みちゃう箱もあるけれど、ノアさんの方舟は染みなかったから頑丈だったのがすごかった！」(N.S.さん)



「僕はね、世界の始まりのお話が好き。神さまの言葉で動物がどんどん増えていったでしょう？ 僕も出来ればいいなあと思うけど、でもできないの。だからそれをできる神さまってすごいと思う」(I.M.さん)

保育者から語られる礼拝での言葉を、心で聴き、想像し、味わっていた子どもたちの言葉が表されました。他にも「僕は羊飼いのお話が好き。あの羊は神さまと羊飼いに助けてもらったから」(N.M.さん)と答える園児もいました。

初めて幼稚園にやってきた年少組の時に、保育者と一緒に祈り、賛美することを通して神さまと出会い、日曜日には教会学校へ出かけ、新たな1週間へと送り出されていく。そうした生活を3年間繰り返し大切にしてきました。これからも青山学院の中で歩んでいくその子どもたちが、神さまの愛に守られてそれぞれの歩みを進めていかれますようにと祈ります。

(文:幼稚園教諭 迫田敏幸)

あなたには、心に残っている聖書のお話がありますか？

今回は、幼稚園から大学の方々に、好きな聖書のお話・聖書箇所を選んでいただき、その魅力や思い出を語っていただきました。

ぜひ、ご自身の好きなお話を思い浮かべながらお読みください。

罪を許してくださるイエスの愛

初等部5年 増田 和

わたしの好きな聖書のお話は、最後の晩餐でイエス様が弟子のペトロに「今夜、にわとりが2度鳴く前に、3度わたしのことを知らないというだろう。」と言われるシーンです。ペトロは嘘をつきました。でも、その時イエス様はゆるしてくださいました。なぜならみんなの罪をゆるし、十字架にかかってくださったからです。ペトロのように人は嘘をつき、罪をおかしてしまいます。しかし、イエス様はゆるしてくださいます。そして嘘をついてしまった人は清い人になるのです。

わたしは4年生のクリスマスに、神さまのご計画によって受洗をしました。教会には1才の時から通っています。わたしはいつも牧師先生に「受洗はいつからできますか。」と聞いていました。そして4年生の10月、牧師先生が「すべてが整いましたよ。受洗、どうですか。」とってくださいました。この時が来たんだと、とてもうれしくなりました。神さまがともにおられる、と思うだけで気持ちが軽くなりました。わたしはイエス様のことを裏切ってしまう行動をしてしまうかもしれません。だけど神さまと一緒に歩み、悔い改めていきたいです。



「宝は、天に積みなさい」

初等部6年 伊波 佳祐



僕は、この春にフィリピン訪問プログラムに参加しました。そこで、僕がまさに体験した聖書箇所があります。それは、箴言13章20節の「知恵ある人と共に歩めば知恵を得る」です。僕は、フィリピン訪問プログラムで、高等部の先輩と9日間、同じ部屋で過ごしました。最初、それを知らされた時には、とてもドキドキしました。けれども、その先輩と一緒に過ごしたり、他の、中・高等部の先輩とコミュニケーションを取ったりしている内に、自分でも実感できるほど、先輩方の影響を受ける出来事がありました。僕ははじめ、何かいいこと

を他の人の前でして、先生や友達に褒められて、喜んでいました。けれども、先輩方は、先生や他人から褒められるためだけでなく、だれも見えていないところで、皆のために、また、フィリピンの子どもたちのために、色々なことをしていました。それはまさに天に宝を積んでいるということだと思います。

マタイ6章20節に「宝は、天に積みなさい」とある通り、僕もこれから先輩方のように、誰も見ていないところでも、心から相手を思っって行動できるような人になりたいです。

■ ノアの箱舟

中部部3年 高園 理紗

このお話が好きな理由

ノアは神さまを信じ続ける正しい人でした。そんなノアを神さまはお選びになりました。ノアは周りの人に理解されず、大変な作業があっても、神さまを信じ続けました。私はそんな彼の姿を尊敬しています。彼のように「自分も正しい人でありたい」と思うようになったことが、このお話を好きになったきっかけです。



その箇所から学んだこと・気づき

私は、ノアが神さまを信じ続けたのと同じように、自分のことも信じ続けていたのだと思います。神さまを信じ、自分を信じていたからこそ、あれほどの大業を成し遂げられたのだと学びました。神さまはいつも私たちを見守ってくださっています。私もこれから神さまを信じ、そして自分を信じて、何事にも恐れずに挑戦していきたいです。

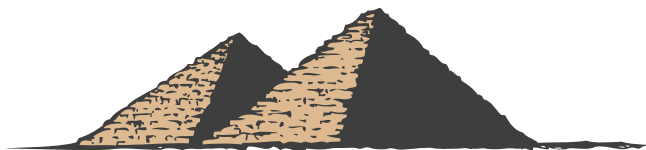


■ 出エジプト

中部部3年 村西 啓吾

神さまはモーセとイスラエルの民にたくさんの奇跡や苦難を与えながらも、彼らを導き、お互いを大切に、世の光になれるようにしようとしました。神さまはただ奇跡を起こされるのではなく、苦難の中にあっても、お互いを大切に、世の光になってほしいと言っていると思います。

僕はつい調子に乗ってしまいそうになる時、このお話が頭の中に浮かび、僕に自制心を与えてくれます。また、苦難を乗り越えることで得られるものがあるのだと思われ、新しいことや苦手なことに取り組んでみようと思うことができます。



一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、一人一人はその部分です。(1コリント 12:26,27)

高等部3年 原 享平

「痛そう、泥臭い」私は高校でラグビーを始める前、ラグビーにそんなイメージを持っていました。しかし今、私はその魅力に深く惚れ込んでいます。ラグビーには品位、情熱、結束、規律、尊重という5つのコアバリューがありますが、特にこのスポーツを象徴するものが「結束」です。15人で戦うこの競技は、一人の選手だけでは勝てず、一人でもタックルを恐れれば負けます。そのためチーム全員が結束し戦う必要があります。自分自身も試合後半、体が痛み「もう無理だ」と思う瞬間私の背中を押すのは、必死に体を張る仲間の姿です。自分を犠牲にしても仲間を助け、信じて託す。体と体がぶつかり合う激しさの中でこそ固い絆が生まれます。聖書には「一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです」とあります。ラグビーの結束は、まさにこの言葉そのものです。誰かのミスをカバーし、仲間の輝きを全員で喜ぶ。この「結束の心」を私たちのクラスや部活動といった日常でも大切にしていきたいと思います。



若き日に、あなたの造り主を心に刻め。災いの日々がやって来て「私には喜びがない」と言うよわいに近づかないうちに。(コヘレト 12:1)

高等部3年 鈴木 琉花

この聖句に出会ったのは、中等部のHR礼拝でした。友人が語った「学校生活にもいつか終わりが来るからこそ、毎日を大切に過ごしたい」という言葉が、深く心に残りました。その後、私は部活動での経験を通して、この聖句の意味を改めて実感することになりました。私は吹奏楽部に所属し、夏の大会に挑みましたが、結果は目標に届きませんでした。悔しさや、先輩への申し訳なさで全ての努力が無駄だったとさえ思っていました。しかし、仲間の言葉によって大切なことに気づかされました。たとえ目標は達成できなくとも、努力の過程で培った思い出や、仲間との絆は本物です。二度と戻らないあの貴重な日々こそが、何ものにも代えがたい私の財産なのだと実感しました。今、高等部で過ごしているこの日常にも、いつか終わりが訪れます。だからこそ、当たり前を感じる日々も、時に辛い日と日々もすべてを神さまからの賜物として感謝し、一日一日を大切に生きていきたいです。



「私」という存在

教育人間科学部教授 山本 美紀

しかし、私は信仰がなくならないように、あなたのために祈った。だから、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい。(ルカ 22:32)

この御言葉は、ヨハネによる福音書13章1節「過越祭の前に、イエスは、この世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいるご自分の者たちを愛して、最後まで愛し抜かれた。」とセットで、イエス様の愛がどういうものなのか、私という存在の真の姿を示してくれるものと受け取っています。

どちらも最後の晩餐でのイエス様の御言葉です。ヨハネによる福音書では、イエス様が免れないご自身の受難と十字架上の死を覚悟しているのに対し、弟子たちはそれを全く察することがないばかりか、誰が一番偉いか言い争うという、いっそ滑稽にも見える状況を描きます。そのような究極の孤独の中で、それでも弟子たちを「愛して、愛し抜く」ことを貫かれた、相手の出方に依らない神の完全なる愛が際立ちます。この御言葉によって、私は自分がどんなに情けない嫌な人間であっても、「神に愛し抜かれている私」という、神が見ておられる「真実の私の姿」を掴んでいられるのです。

一方、ルカの福音書「あなたのために祈った。だから、あなたが立ち直ったときには、」との御言葉からは、「あなたのためになら、死ぬます！」と豪語するペトロに対し、冷や水を浴びせているのではなく、ペトロがこの後大きな失敗を犯し、どれ程自分に落胆するのかをわかった上で、「祈っているからね。きっと立ち直るから」という、イエス様の優しい励ましが聴こえます。それは、失敗を重ね落ち込むであろう彼への「それでもなお、信頼を寄せ期待している」というイエス様からの篤いメッセージでもあり、ペトロと同じように過ちを犯さずには生きられない私さえ、それでもなお「神に信頼され期待されている私」であることを何度でも思い返させてくれるのです。

熱しやすくどちらかという単純なペトロが弟子たちの筆頭であったこと、また12弟子たちが必ずしも望ましい弟子たちではなかったことを、私は神さまの絶妙な差配と思い感謝してきました。これまでの人生を振り返ってみて、この2つの御言葉には何度も助けられてきました。いつまでもたっても情けない自分にうんざりするとき、私がどのような者かに関わらず、神さまに一方向的に完全な愛で愛し抜かれた存在であり、どんなに失敗を重ねても、事の前にイエス様に祈られ励まされ、信頼をもって期待されて、人生のあらゆる経験が個人的な閉じられたものに終わらない未来が準備されている存在であることを思い起こさせてくれるのです。

十字架の愛が教えてくれた生き方

地球社会共生学部4年 伊藤 小晴

友のために自分の命を捨てること、
これ以上に大きな愛はない。(ヨハネ 15:13)



私が最も好きな御言葉は、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」というイエス様の言葉です。この御言葉は、イエス様が私たち一人ひとりのために十字架にかかってくださったことを示しています。朝目覚めたとき、学校へ向かう道を歩いているとき、忙しさに疲れたとき、何かに苦しんでいるとき。どのような時でも、この御言葉は私に、他の何にも代えることのできない力を与えてくれます。私は自分の力によって救われたのではありません。罪のないイエス様が、私たちの罪を贖うために十字架にかかってくださった、その大きな愛によって救われました。この御言葉を読むたびに、「私はこれほどまでに愛されているのだ」ということを改めて思い起こします。だからこそ私は、自分自身に問かけます。「私の生き方を通して、人々はイエス・キリストを見ることができるだろうか」と。そのためには、人を愛そう、優しくしようと努力するのではなく、まず私自身が神さまの愛を大胆に受け取ることが大切なのだと思います。

この御言葉はまた、神さまから与えられた恵みや賜物をどのように用いるのかについても、私に問いかけ続けてくれます。そして、その問いは、日々の礼拝やキリスト教概論を通してさまざまな角度から学んできた、青山学院のスクールモットー「地の塩、世の光」にもつながっています。私たちは、努力して地の塩や世の光になるのではなく、神さまによってすでにそのような存在として召されています。青山学院大学に入学できたこと、4年間学び続けてこられたこと、学ぶ機会や環境、そして学ぶ力そのものも、私自身の努力だけでは説明できません。すべては恵み深い神様のご計画の中で与えられたのだと信じています。だからこそ、神さまから与えられた賜物は、自分のためだけではなく、人に仕えるために用いるべきものなのだと思います。十字架にかかられるほど私を愛してくださった神さまは、一人ひとりに賜物を与え、それぞれの歩みを導いてくださっています。だから私は、まず神さまの愛を受け取り、信仰をもって歩んでいきたいと思っています。その歩みが言葉や行いとなって自然に表れ、それを見た家族や友人が、私ではなくイエス様を見ることができるような生き方をしていきたいと思っています。